

---

# 刹那の時。

RYUN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

刹那の時。

### 【Nコード】

N6005H

### 【作者名】

RYUN

### 【あらすじ】

性別関係無しに、生徒からも先生からも人気者の先生は、私の好きな人。新米教師で、要領がよくてイケメンな先生。先生が私を選ばなくても、私はきつと先生を選ぶだろう。周りの強引な男にはきつと、靡かない…。はず。右京姫香の恋の行方、分かりません。

第一話・禁断の片思い（前書き）

傾向、切なく頑張ろう！です）、・・・（

## 第一話：禁断の片思い

男子生徒とは馬鹿みたいに騒ぎ、女子生徒には馬鹿みたいに騒がれ。生徒にも先生にも、年齢・性別問わず人気のあるこの男は、数学担当の先生であり、私の担任である。

みなざわきょう  
皆沢叶。

新米教師で、この学校には去年入ってきたばかり。そんな今年で二十四歳になる彼は、愛想がよく要領もイイ。まあ、要領がよくなきや生徒と先生の付き合いを両立することなんて無理な話だとは思うが。

でもその割には、「皆沢先生は、川村先生と矢野と二股をかけている」なんて噂がたりたりもしたことが過去にあった。

川村先生とは、美人な英語教師だ。背は高く、男教師からの誘いもやまない。

けど、川村先生は皆沢先生とは違って誘いを断りまくっている。矢野とは、学年一男受けする顔をもつ美少女だ。

どちらかといえば、美人というよりは「かわいい」。それは、彼女が童顔で身長が低い為だろうか。

彼女たちによれば、はた迷惑な噂…でもないかもしれないが。けど、そんな間違った情報を流されて、他のライバルたちに色々と因縁をつけられてイジメられるなんてのは絶対に嫌だろう。

なんの関係もない彼女たちがそんな目に合うのはかわいそうだと思うが、皆沢先生にいたってはそんなことは一瞬でも考えはしなかった。

いつも来るもの拒まずみたいな態度とってるから、反感買っ  
んだよ。自業自得……

けどこんなのはただのやきもちだ。だって私は、先生のが好き  
だから。

「…じゃあ、次。xとyの関係式。これは簡単だろう。誰かにやっ  
てもらおっかなあー。」

ルンルン口調で人差し指をきよろきよろと動かせる先生。

そんな先生に、内心ときめきつつも表では冷静な態度。

私はなんてかわいくないんだろう、としみじみ思う。

「…じゃあ、右京。」

人差し指の延長線上には私がいた。

先生は、にこっと笑って私の名前を呼んだ。

正直みんなは、先生のごことは好きだけど先生の授業はどうでもいい  
みたいだ。

でも、私はちゃんと聞いている。

そのおかげで、授業を聞かない人に対する悲しい瞳も見れてしまう。  
そんな時、いつも思う。

先生の授業、ちゃんと聞いている子いるよ。

それは私、だけだね。

「…出来ました！」

私が黒板から目を離し、先生の方を振り返った。  
先生も私の方を見てて、私と目が合うと微笑んでくれた。

「…正解。簡単だったかなあー。」

「私、復習問題なら出来るんです」

「あー、だからこの問題は出来たんだな。」

こんな言い方をされたら、普通むかつくだろうけど…

本当のことだから。この問題は出来るけど、他の問題は出来ない…

そう。私は、頭が悪いのだ。

けどその分復習を頑張る。

先生も、それは分かってくれたみたいだった。

「嘘だよ。お前は努力家だからな。学力も、これから伸ばしてけば大丈夫だ」

そう言っつて私の頭を軽くぽんぽんと叩くと、フツと微笑んで手を離れた。

この時、「もう一生頭は洗わない！」なんて定番なセリフを頭に思い浮かべたが、私はそんな純粹な考えさえも「洗わなかったら汚いじゃん。」と冷静に片付けてしまった。

私は無言で席についた。

相変わらず教室のみんなは先生の方をみていない。

いや、見ている人はいるんだけど、肝心の授業を聞いていない。

私が席についた瞬間に先生を見てみると、先生はやっぱり寂しそうな顔をしていた。

「要領はよくても、やっぱり新米か…」

私がそう呟いてみる。

周りにはうるさいから、こんな私の言葉もかき消してくれる。そういう面では、こんなうるささも便利だな、なんて思った。

「おい。みんな、俺の授業聞いてくれよ〜」

先生がとうとう苦笑いしながらみんなに言った。

みんなは先生の方を見たけど、「だって数学は嫌いだから」なんて言ってまた自分のしたいことを再開する。

そして先生は、とうとう怒った。

「苦手だからって授業聞かなくていいわけないだろ！てかその逆。

ホントに聞きたくないやつはでてって？俺が悲しくなるから」

怒ってても、やっぱり先生の顔に威厳は感じられない。いつもの、優しい先生。

こんな優しい先生だけど、みんな先生の言うことちゃんと聞いている。

その辺は、先生の中に何か魅力があるからなのかな、と思う。

「皆沢センセ〜。ごめんねえ…」

一人の女子生徒がちょっとだけ申し訳なさそうに言う。

その発言の後に、別の生徒が言った。

「センセー！それなら、質問会とか開いたらどうですか？質問する時って、授業で聞いた上でも分からないから更に聞きたいからするじゃないですか？先生人気だから、質問したいからって授業を聞いてくれる子が増えると思うんですけど」

馬鹿な私は、そんなこと思いつかないから、それを提案した子に「ナイス！」って心の中で思った。

「あーいいな、それ。んじゃあ俺質問会聞くから、ちゃんと授業聞いとけよ！」

先生が満面の笑みで言う。

女子生徒は、声に出さないだけで心の内で「かわいい…」って思ってるに違いない。

だって、私はそうだから。

先生が好き。

そりゃあ、先生がたくさんの子の中から私だけを選ぶなんて可能性は少ないけど…

けど、もしかしたら、なんて思ってしまう。

けど、その可能性さえ先生の言葉でなくなってしまった。

「まさか。生徒と恋愛なんてありえないだろ」

聞いてしまった。

学校の裏庭で、皆沢先生と、皆沢先生と仲のいい柏木かしわぎ先生が話しているところを。

二人は、煙草を吸っていた。

そんな皆沢先生の仕草もかっこいいと思ったけど、体に悪いからやめてほしいな、とも思った。

こんな呑気なことを考えながらも、悪趣味ながら先生たちの会話は

きつちり聞いていた。

「お前、女子生徒にモテモテじゃん。いーよなあー。」

そう言ったのは柏木先生だった。皆沢先生は、微笑んで柏木先生に言う。

「悪いな。俺、元からなんだ。」

「うわっ、むかつくー。つか、あんだけもててんならお前のことだから陰で付き合ってたりするんじゃないの！？禁断の恋、みたいな感じ！」

柏木先生が笑いながら言う。

皆沢先生も同じように笑いながら、言ったんだ。

セイトトレンアイナント、アリエナイ

。

そう言った皆沢先生の表情は笑っていながらも、いつもの明るい皆沢先生からは想像もつかないような冷たさをもっていた。

固まる体。

冷たくなっていく心。

私はその場から逃げ出すことが出来なかった。

けど、体が動かなかった代わりに心だけが逃げちゃったみたいで、あたしは意識を失った。

遠くの方で、愛しい声が「右京！」と何度も私のことを呼んでいた。

私は、その声を聞いただけで頬がゆるんでしまった。

## 第二話：保健室で。

.....。

「ん…」

ここは、どこだろう。

視界に広がるのは、白。

白色の景色…。

「大丈夫ー？気絶してたみたいだけど。」

この声…

皆沢先生じゃない。

保健室の先生。…みどりかわ緑川先生。

この先生も、イケメン。女子生徒に人気のある先生。

私は、タイプじゃないけど。だってこの先生、無駄に色気だしててもうわざととしかおもえな…

「色気は元々だよ。別に、わざと色気出してるわけじゃないよ?」

…私は、どこから口に出していたのだろうか。

クスクスと笑う緑川先生は、私のいるベッドに腰掛けた。

接近しすぎ。

こんなの、皆沢先生にやられたら私…

「ごめんね、皆沢先生じゃなくって。でも、失礼だねー。こんなイケメンよりもあんな裏表ありそーな人の方がいいなんて。」

ほら、やっぱり無駄。

この人が好きなわけじゃないけど、この人の香りとか、オーラに……くらくらする。

「そんなに固まらなくても。別にとって喰おうなんて思っちゃいな  
いよ」

「じゃあ、くつつかないで下さい」

「んー？何？」

意地悪そうに微笑む彼は、意地悪に囁く。

「…ねえ、右京さんはさあ。先生と生徒の恋愛って、アリだと思っ  
？」

唐突な質問に、少し動揺する。

いや、いきなりなことに動揺したんじゃない。

今一番突っ込まれたくないことだからだ。

てゆうか、どうしてこの人はこんなことを聞くの？

「私は…アリだと思います。」

実際、今の私の好きな人は皆沢先生だしね。

「そつだろつね。だって右京さん、皆沢先生のこと好きなんだもんね？」

「えっ…なんで知ってるんですか！」

先生は、馬鹿にしたように私を見た。

「だって…態度でバレバレだよ。それに、俺よりも皆沢先生の方がいいなんて言っちゃってさ…」

「う…」

「ほんつと、むかつくよね。」

先生はそう言つと、私に返事をする時間も与えずに私に近づいていった。

っ、キスされる！

「……………」

思わずつぶつた目をゆっくりと開けると、先生の顔が目の前にあった。

けど、唇は触れてなくて、ぎりぎりのところで止められていた。

しばらくすると、先生は私から離れた。

そして、何故か爆笑。

「ははははっ！何されると思ったの、右京さん！」

「な、何されるって…」

「ん？言ってみな？」

意地悪く言われて腹が立ち、私が寝ていたベッドにあった枕を先生の顔面に投げつけた。

「何にもないですっ！じゃあ、教室戻るんでっ。失礼しました！！」  
勢いよくドアを開けて、勢いよくドアを閉めて教室へ向かって行った。

「…かわいいなあ」

私が保健室を出てから、緑川先生にこんなことを言われてるなんて知る由もなかった。

### 第三話：保健の先生と私の男友達

走っていると、誰かに激突した。

「ったあ〜…」

「ってえ〜…って、右京じゃん！大丈夫なのか？貧血って聞いたけど。」

衝突した相手は、クラスメイトで、男友達でもある佐々木由馬なみきゆつまだった。

「ああ…大丈夫…」

「寝とかなくて大丈夫？つーか何で走ってるの」

「ええ！？それは、あいつが…」

「あいつ！？あいつって誰だよ！」

「えーと…緑川センセ？」

首を傾げながら言う。

「俺に聞くなよ。こつち質問してる側なのに」

「ごめん。でも、とりあえず緑川先生」

「まさか、あいつにパシられてんのか!？」

「いや…なんも…ただ私が勘違いして逃げただけで」

「それ勘違いじゃねえだろ…」

佐々木が、ふうとため息をついて言った。

さすがはお察しの早い。…って…

「勘違いに決まってるじゃん…!!じゃなきゃ、なんなの？だって、

あんなフェロモン野郎が私にキスするわけ…」

「だーれがフェロモン野郎だって？ん？」

背中に感じる悪寒。ゆっくりと振り返ると、そこには彼がいた。

「で、出た…！！」

「俺は人間デスヨ。あんまり体調も良くないんだから、保健室に力ムバツク。おいで？」

「いーやーでーすっ！お断りです！」

「俺もお断りだっ」

なんかよく分からないけど、佐々木も私についた。

「でも、ホントに寝たほうがいいよ？」

「誰と？」

「それはもちろん俺と…って、そうじゃないでしょ？」

すかさず質問を入れてくる佐々木に、何故かノリ突っ込みをする緑川先生。

二人って、案外ナイスコンビ？

なんて、そんなつまらないことを考える私。

「とにかく。皆沢先生には言つといたから。先生も心配してたよ？」

この人…意地悪だ。

私の弱点が皆沢先生だと知ってて、そんな脅すようなこと言ってるの？

「…分かりました。三時間目だけ寝ます。」

「じゃあ、俺もい」

「キミは元気でしょ？」

緑川先生は佐々木の言葉をさえぎって、にっこりと笑って言った。佐々木の顔は引きつっていたけど、私の付き添いに、と結局ついてくることになった。

「右京さん、辛くない？抱えてあげようか？」

「大丈夫です……」

「いいから」

緑川先生の、その裏のありそうな笑顔に圧倒された。もはや、私に拒否権はないらしい。

「あ……すみません……じゃあ……」

「おい！何言ってるんだよ！それなら右京、俺がやってやるよ！」

「佐々木は無理でしょ」

苦笑いする私。

佐々木は、かなり落ち込んでるように見えた。

先生はそんな私たちを見て、クスッと笑う。

そして私を抱きかかえる前に、何かを佐々木に言っていた。

「バレバレなんだよ。姫香への態度が」

何を言ったかは私にはよく聞こえなかったけど、佐々木はそれを聞いて顔色を変えた。

佐々木は、真っ赤になったまま「てめえさり気なく下の名前で呼んでんじゃねーよ！」と叫んだ。

「先生、何を言っただんですか？」  
「ナイシヨ」

妖しく微笑む先生は、やっぱり色気があると感じた。  
佐々木は、何かぶつぶつ言っていたけど、怖くて突っ込めなかった。

「じゃあ、右京さん。大人しく寝ててね？」

「はい…ありがとうございました」

保健室につくと、先生はベッドまで私を運んでくれた。  
先生は私をベッドに寝かせてくれた。

「じゃあ、お大事にね」

そう言っただけ先生は、カーテンを閉めてくれた。  
私はふう、とため息をついて天井を見上げた。

カーテンの向こうでは、先生と佐々木が何かを話していた。  
時々佐々木の声が荒くなる。

何の内容かは分からないけど、緑川先生はいつでも余裕だな。

やり取りを聞きたかったけど、睡魔としんどさが同時に襲ってきた  
ので、私は寝ざるを得なくなかった。

第四話：男同士の話 佐々木視点（前書き）

この話は会話文が多いです。（つかほとんど会話文と佐々木の気持ちのみで構成されている）

すみません、とりあえず…m（――）m

#### 第四話：男同士の話。佐々木視点

「バレバレなんだよ。姫香への態度が」

その言葉を言われた瞬間、頭の中で「殺」の文字が俺の脳内に現れた。

それと同時に、この緑川に対する対抗心のようなものを覚えた。

こいつ、誰に断って右京のこと呼び捨てで呼んでんだよ！！

っーか、何で野郎の前と右京の前での態度が大幅に違うんだよ！

もしかして、アイツが地出すのって俺だけ！？

だったらある意味すっげームカつく。

他のやつには全般的に優しいくせに…

詐欺だ…

色々心の内で思うことは多い。そして、大抵心の中で喋っているときは、現実ではだんまりか呟き。そして今まさに、俺は呟きの状態。

「あーそうだよ。

確かに俺の右京への態度はバレバレだよ。分かりやすいよ！

そんなこと俺だって気づいてるっつーの！

でもそんなこと気にしてたら、アイツに好きな人が出来るかもしれねえだろ！！

つか、もついたりして！って、その相手が俺じゃなきゃまじで笑えねえ！！どうすんだよ！

つか、あれか？まさか、緑川を好きになったんじゃ…  
いや、それどころじゃなくて、もー付き合ってた… あああ俺の初  
恋！

いや、まだ大丈夫だ。まだ終わってねえ！まだ終わったと決まった  
わけじゃねえ！

にしても緑川あのうさんくさい笑顔…ム力つくな…  
くっそー…さつきだって、右京のことを…ひ、ひ…姫香………って  
言っただし！

馬鹿にしゃがって！右京はお前のものじゃねえんだよっ！  
って、問題はそこじゃねーんだよ！話を戻せ、俺！

いや、待て。そもそもどういいう話してたんだっけ…あれ？

「長文ご苦労様。でも、誰も聞いてないから、お前の作文なんて。」

「うわっつっ！んだよ、いきなり！って、右京は！？」

「お前、馬鹿？姫香は今寝かせたところだろ」

「右京を呼び捨てにするな！っーかお前が言うってエロい！」

「はあ？残念ながらお前に罵倒されても全然嬉しくねーんだけど」

「黙れ変態！」

「だから嬉しくないっつってんだろ？ちゃんと聞こえてなかったの  
か。聴力の再検査でもして、俺とゆーっくり語り合う？佐々木くん」

「キモい！佐々木くん言うな！」

「んじゃお前。つか…いいのか？語り合わなくて。」

こいつが、本気で俺に「語りあう」とか言っていたなんて信じられ  
なかった。

でも、本当に…こいつと語り合ってたってロクなことがないに違いな  
い。

うん、馬鹿な俺でも断言出来る。

きつと語り合ってたよかったなんて思えるの、一パーセント未満だろ  
う。

「はあ！？誰がお前と語り合うか！」  
「ホントにいいのか？……ひ・め……」  
「分かったー！何についてだよ！ただし三十秒だけな！」  
「おい、それ語り合うっつわねえよ。」

都合の悪いことは基本シカト（特に緑川の場合）、佐々木由馬くん。

「ー……ー……」

「ちっ、もうカウント始まってやがる」

「ホラ、かたらねえのかよ」

馬鹿にされてた分、鼻で笑ってやった。

今、多分優位に立っているのは俺だ！！

「クス……」

…笑われた。何で？

「分かったよ。言ってるよ……右京、好きなヤツいんぞ」

緑川は、ずっと右京のことを俺に話すときだけ「姫香」なんて呼びやがって馬鹿にしてたくせに、いきなり「右京」と呼んだ。もしかして、まじでだろうか。

「言っとくけど、まじだぞ。しかも相手は…あー厄介。」

「……………っそれ、誰だよー！」

「それは…お、三十秒経った。」

さっきまで優位に立っていたような気がしてたのに、今は完全に立

場逆転だ。

緑川は、さっきの俺のように鼻で嘲笑った。

「…じゃ、終わりだな。」

「はあっ!? 言えよ、気になんたる!」

「……人に頼みごとするときは?」

「お願いします緑川先生教えてください」

あー、もう、プライドが…こいつに対するプライドが…

「言うだけ? あれ? …ど、げ、…」

「お願いします」

そう言つて、俺は地面に額がつく位まで深深と土下座をした。

「まじで好きなんだなあー。青春? お前のその恋、潰しがいがある  
だろうな」

「はっ!?!」

「冗談だよ。…教えてやるよ。」

「……………サド教師」

「あ? なんか言ったか?」

「イエナニモ。」

俺が余計なこと言つたたびに、ことが焦れてきている気がするから、  
もう口出すをするのは止めることにした。

「で? …教えてくれ。」

「ああ。その好きな人なんだけど…」

心臓が無駄に跳ねている。苦しいほどに。

「相手は、先生なんだよ」

「……………は？まさか、お前とかいわねえよな？」

「……………」

ここで緑川先生は考えた。

真相は、やはり焦らした方が面白いので、言わないことにしよう、と。

俺は、何も知らない。

こいつの沈黙の間、何を考えてやがるのかを…

「わりいな、実は俺なんだ。」

「……………自意識過剰も大概にしゃがれ！！俺の敬語と土下座を返せや……」

こいつ、やっぱり気に入くわねえ。

第四話：男同士の話 佐々木視点（後書き）

ホントにすいません。

あと、佐々木の独り言を鍵カッコで綴ったところがありますが…改行していますが、一応故意にやっています！気分を害されたらすいません。つか、会話文が多い時点でもう無理ですよね><。

## 第五話：先生！？

私は今、夢の中にいた。

その夢では、皆沢先生が登場した。

私が丁度保健室で目を覚ました時、皆沢先生が来てたっという設定。一瞬現実かと思った。けど、その皆沢先生は言ったんだ。私のことを…「姫香」って、呼び捨てにしたの。

それで夢の中だっって確信した。そして大胆に、「好き」って何度も言ってみる。先生は、さっきまで微笑んでいたのに………どんどん顔が曇っていく。

なんで？夢の中であんなに、いい夢見させてよ……！

「っ……！！」

目を覚ました。一瞬、緑川先生が目の前にいるかと思ってびくびくしてたけど、いなかった。

カーテンの向こうで、緑川先生が机に座っている。

「あの……せんせ………？」

おずおずとカーテンを開ける。先生に話し掛けようと思ったのに、

先生は机の上につつ伏せになって寝ていたのだ。どうしたらいいのかわからなかった。とりあえず、保健室のソファにあった毛布を被せようと、持ってきた。そして、先生にかけようとしたとき……

「……！」

緑川先生は、私の腕を掴んだ。起きたのか、と思ったが、先生は相変わらずすうすうと寝息を立てている。私はホッとため息をもらした。

「……………か」

「え？」

寝ている相手に、思わず聞き返した。

「ひめか……………」

「……………ひめ、か？ん？」

緑川先生は、「ひめか」と言った。もし、このひめかが「姫香」のことだとしたら……

この純粋な少女は、何を想像するだろうか？

「わ……たし？」

保健室で一人、顔を紅潮させてその場にへたり込む。相変わらず、先生は私の腕を掴んだままだ。

先生が寝ていて、本当に良かったと思う。起きていたら、腕の脈動

からドキドキが伝わってしまう。顔が赤いとばれてしまう……ひめかの正体が、私ではないかもしれないのに。

「んん……」

先生がその声を漏らすと、私の腕から先生の手が離れた。そしてその離れた先生の手は、重力により下にずり落ちた。

私は、このまま起きそうにない先生の側に、メモを残した。

起きたので、教室に戻ります。 右京

保健室から出て、廊下を歩いていた。廊下は騒がしい。時間を見ると、もう授業が終わっていた。

どうやら、今休み時間が始まったばかりのようだ。

「……あ、右京」

目の前にいたのは、佐々木。なんだ佐々木か、と思いつつ佐々木を見上げる。

「なんだって、酷いヤツだな。折角迎えにきてやったのに。」

「聞こえてたの？てか、お迎え？別にそこまで私重症じゃないし……」

「いーんだよ！俺が来たかったんだから。」

気のせいか、佐々木が少しイラついている。んー、なんで？

「てか佐々木がそこまでする必要はない？」

「……………お前ってさ……」

暫しの沈黙の後、佐々木がため息をついて言った。

「ニブ。」

佐々木はその一言だけ言うと、くるっと後ろを向いてスタスタ歩き出した。

結局何が言いたかったのか分からず、ただ首を傾げていた。

そのことを考えるのはやめて、とりあえず教室に向かった。

「……………気になんねえのかよ…バカ右京…」

佐々木は廊下で立ち止まり、そう言っていた。

しかし私には知る由もなく。佐々木の「ニブイ」という言葉の意味さえも知ることはなく。

ただ、考えることは皆沢先生と緑川先生のことではいっぱいだった。

第五話：先生！？（後書き）

「えっ…俺のことは頭はないのかよ…」 by 佐々木

第六話・危険（前書き）

ちよつと、エロいかもです）\* > < \*（

## 第六話：危険

「じゃあ、終わり。」

「きりーっ…礼…」

「あ、右京は終わったら俺のところに来いよ！」

はあ…授業とか、全然頭に入らない。って、なんでみんな立ってるんだろう？そして私もなんで立ってるんだろう。てか、あれ？皆沢先生？ああ、今、数学の授業かあ…あーあ。先生がこっち見てる気がするー。なんて。自惚れも大概にしないとな…あーあ、凹むなあ。

「おい。聞いてんのか、右京！」

あ、やっぱり私のこと見てたんだ！嬉しすぎる…って、みんな…抱持って…んん？あれっ？みんな教室から出て行く…先生と私を二人きりにするつもりなのかな…みんな、私の気持ちに気づいてたんだ…わー、こんな仲間思いのクラスメイトをもつ私って幸せ者…！でも、佐々木邪魔だし。空気読んでよね！

「たっ！」

急に、頭に軽い衝撃が走った。目の前には先生。そして、今の衝撃の原因は、先生が私の頭を軽く叩いたから。

「聞いてんの？無視すんなよ。なんか腹立つ！俺のことシカトとか…もういい、お前、教材室来いよ。大したことじゃないけど、話もあるしな。ご希望とあらば、お説教もしてやるけど。」

「行くんで、お説教は勘弁してください…」

もうHRが終わったのだと気づいた。みんなは、帰っていっただけなんだね。

「おう。ちょい遅れるかもしれねえけど、待ってるよっ!」

先生はそう言い残すと、急いで教室を出て行った。そんなに、急ぎの用事でもあったのだろうか。

先生が教室から出て行くと、私は教材室に向かった。廊下では、まだ生徒が喋っていた。帰る気配はない。そのくせ、教室から出て行くのは早い。みんな、そんなに教室が嫌いなのだろうか。

そんなことを考えているうちに、教材室の前に着いた。当然、先生はまだだろう。だけど、緊張してしまう。そして、それと同時に、話の内容は何かという素朴な疑問が生まれる。教室の扉を開けた。

「失礼しまーす…!」

誰もいないと思っているのに、つい出てしまった一言。私は、ゆっくりと教室の扉を閉めた。それから、奥に進んだ。ふと、人影が見えた。先生かと思って、小走りになりながらその人影へと向かった。しかし、そこにいたのは…床に座り込んで壁にもたれて寝ている、知らない男の子だった。かわいい顔をしていたため、後輩だな、と思った。でも、先輩だったら嫌だな。だから、もし起きて話し掛けられたら、敬語で対応しよう。うん。

「ん……んう~~~~っ!」

いきなり、男の子が唸った。振り返ると、身体を力いっぱい伸ばしていた。起きたんだ。

彼は、目をぱつちりと開けると、私をみつめた。長い間みつめられ

て、顔がどんどん熱くなっていくのが分かった。

「先輩？俺、一年なんですけど。」

あ、やっぱり後輩だったんだ。

「私、二年。やっぱり後輩だったんだね！」

柔らかく笑ってやると、男の子も私に笑みをを見せてくれた。少しときめいていると、視界がいきなり天井に向いた。……ん？

「今日の相手って、先輩だったんですね！超かわいい……じゃ、早速しよ どうしてほしい？」

私は男の子に何故か押し倒されていて、「かわいい」だの「する」だの分けのわからないことを言われている。てか、「相手」ってなんでしょうか？聞きたいことは山ほどあるけど、今は冷静に質問できる状態ではなかった。

「ちょ、ちょっと待って!!」

「…なんですか？俺、もうヤバイんですけど。」

「あの…なんか、勘違いしてないかな？」

「勘違い？してませんよ？」

「私、キミに会いに来たんじゃないんだけど…」

ひとまず、誤解を解かないと。そう思って、男の子からの視線を受けないように顔を逸らしながら言った。

「うん。知ってるよ、そんなこと。起きたら、かわいい人がいる。そんなの、襲うに決まってるじゃないですか。」

こいつ…さっきから思ってたけど、先輩って分かってるのにタメ語ってどういうことだよ。しかも、初対面で襲うって…こんなかわいい顔して…

「じゃ、もういいですよね。」

男の子は、にこつと笑って私の首筋に顔を埋めた。

「ちよっ…!!あ…ん」

「クスッ。かわいいな…」

男の子はそう言うと、右手を私の左胸に移動させた。

「やめ…これ以上は、まじでやめてって…」

「でも、応えたのは先輩じゃん。」

「ちよ…っ、いやーっ!!やーめーてーっ!」

大声で言うと、男の子は顔をしかめた。そして、私の上に覆い被さっていた身体を退かした。

「ちっ…萎えるし。」

男の子からは、険悪なオーラ。私は、一步後ずさった。

「嫌がるなら嫌がるで燃えるけどさ…もっと、エロい抵抗とか出さないわけ」

そして溜息を漏らされた。最悪なんですけど。

「…あ。誰か来たっぽい。」

彼は言った。確かに廊下からは、足音が聞こえる。それも、一人分の。

「近づいてくるね…こっち来るのかな？」

クスクス笑う彼。そして、彼は私の身体にもう一度覆い被さった。

「さつき俺を萎えさせたお仕置きに…ぐらい、いいですよね？」

意地悪な笑みでそう微笑んだ彼は、自らのネクタイをしゆるしゆる解いた。そして、それで腕を拘束した。そして、私の制服のボタンを第三まで開けた。

「や…やめて…」

どうしよう。ここに入ってくるのが、先生だったら。そうだったら…こんな姿、見られたくないよ…  
悲しくなって、涙を溢した。

「ふ…っ…っ」

「そうそう…そんな感じだよ…先輩。超エロい。」

ああ、嫌だな。何されるのかな…私、まだ処女なんだけどな…いくらかわいい顔した後輩にだって、好きな人以外にはこういうことされたくなかったな…

「じゃあ、そのまま置いてね？誰かが来るまで…俺は、隣の教室に行きますから。」

「ひどいっ！このネクタイ、解いてよ！！」  
「お仕置きだ、って言ったでしょ？心配しなくても、先生か誰か来るでしょ。じゃーね」

一方的にそう言われて、彼は「第二教材室」に通じる扉からこの教室を出て行った。

「ひ…っく…」

ただ、一人で泣くことしか出来ない自分に、腹が立つ。  
足音が近づくと、そして、その足音がこの教室の前で止まった。

「右京 ……」

ああ、皆沢先生だ…

最悪。

「奥にいるのか？」

皆沢先生が、また近づいてくる。

「右京…っ！？お前…どうしたの？それ…」

見られた。私は、先生の方を見れなかった。顔を床に向けていた。

「右京！こっち向けよ！」

先生に顎を掴まれて、無理矢理先生の方に顔を向けさせられた。先生は私を見て、顔が赤くなっていた。

「じゅめ…っ」

そして、私から離れた。でも、私はそれが寂しく思えてきて…。

「離れないで下さい…っ！」

ああ、私はなんてことを言ったんだろう。先生を困らしてしまうことばかり言っつて。

「それと…このネクタイを、解いてもらってもいいですか…？」

先生は、私に近寄ってきた。そして、震える手でネクタイに手をかける。たまに、先生の手が微かに腕に触れる。その度に、私の緊張は高まる。そして、ネクタイが解かれた。

「ありがとうございます！」

私は、ふらつく身体を起こせず、へたり込んだまま頭を下げた。

「ばか…っそれ…ボタン閉めろ…っ！」

先生が真っ赤になりながら言った。見てみると、第三まで開けられたブラウスの隙間から、下着が見えていた。

「すみません…」

私も真っ赤になった。

「右京…話あるっつたけど…やっぱり、また今度にして！」

先生は一方的に出て行って、私を取り残した。寂しくなったけど、先生が来てくれたおかげで私の涙が枯れていたことが分かり、嬉しくなった。

## 第七話：彼の正体

先生が出て行った後、私も教材室を出て行った。準備室の前を通る。

「せーんぱい」

準備室のドアのところに、先程自分を拘束した少年が腕を組んでもたれかかっていた。彼の表情は作られた笑みだった。それに少し怯み、後退する。それに対して、彼は私にじりじりと近づいてきた。

「お仕置き。どうでした？」

とうとう壁まで追いやられ、顎を掴まれた。年下とはいえ、彼も男の子。力は自分よりもあるし、身長だって……

「最低」

彼の手から逃れようと、顔をそむけてみる。彼はそれが気に入らなかつたのか、顎を掴んでいる手の力を強くした。そして、無理矢理彼の方へ向けてくる。

「痛っ……」

「皆沢先生も、お堅いですよね。かわいい女の子があんな恥ずかしいカッコしてたのに……何もしないなんてね。でもきつと、理性保つのに必死だったんでしょね。」

「皆沢先生は、そんなことしないよ……」

「そうかな？」

彼は、顎を掴んでいた手を離れた。それと同時に、全身の力が抜け

たように床にへたり込んだ。

「先輩つて、処女またなの？」

「…なんでそんなことあんたに言わなきゃいけないの」

「んー、確かめてもいいけど」

「処女！」

彼が皆言う前に、言い切った。彼は色つぼく微笑んだ。その顔をみて、思い出す人物。

げ。緑川先生。

彼の顔といい、性格といい…。性癖といい。（彼はドSとみた。）  
彼は、緑川先生を連想させる要素をたくさん持っていた。

「先輩、名前教えてよ」

突然彼が、へたり込んでいる私に手を差し伸べた。私は、その手を振り払う。

「言うわけないでしょっ！！」

「あ、そっか。人に名前聞くとときは、自分の名前を先に言わないといけないもんね」

彼は振り払われた手で、私の腕を無理矢理引っ張って起こさせた。そして、まだふらつく私に、耳元で言った。

「俺の名前は、緑川みどりかわけい慧けいつていいいます。慧けいつて呼んでくださいね」

「誰が…っ…っ…って、え？緑川…っ…っ…」

「緑川みどりかわなつめ棗なつめの弟ですっ」

緑川棗……！！誰それ！！あの保険医の名前って、棗だっけ？覚えてないな……

「この学校の保険医をしている緑川の弟です。…これで、分かりますか？」

………

「ええええええ〜っ！？緑川先生って、弟さんいたんだあ！！」

「弟さんってゆーの、やめてください…慧って呼んでください！」

「えー……まあ、緑川くんっていうのもなんかキモいしな…んじや

あ、慧君で！」

「まあ、いつか。で、先輩の名前は？」

なんだか腑に落ちない顔をしていたが、慧はまた微笑んで言った。

「…右京。」

「下の名前も言いましたよね、先輩？」

再び腕を掴まれる。再びふらつく足元。何かされそうな予感がしたので、意を決した。

「右京、姫香。」

「………姫香…？」

何故か、慧は姫香の名前に反応した。そして、少し考え込むような素振りを見せた。

「かわいい名前。姫って呼ぶね」

「ヤダ！しかも、私仮にも先輩じゃん！敬ってよね！」

「んじゃあ、姫様？」

「…もういいよ、姫で」

どうやら先輩と呼ぶ気はなさそうだ。少し、先輩と言われることに憧れていた為、ショックを受ける。

「姫。もうみんな帰ったっぽいから、帰りましょう？」

そう言って、手を差し出す慧。私はその手を取り、冗談交じりに言った。

「ええ、そうね。」

言った後で、二人で笑ってしまった。「姫」って言われて、敬語使われるなんて…まるで、私の部下みたい！それに、人前でやられると恥ずかしいので、姫と呼ぶなら敬語はやめてくれと言った。すると、慧はあっさりと敬語をやめた。やはり、なめられていたようだ。

「姫、送るよ」

そう言って、慧は私を送ってくれた。家まで？いや、駅まで。

## 第八話：友達？（前書き）

更新が、お久しぶりとなってしまうました。（意味不）

実は、パソコンが故障してしまいました…。；；

祖父が直してくれたので、問題はないのですが。

「刹那の時。」の更新を待っていて下さった方、本当に申し訳ありませんでした。当分pc投稿ができず、ipodからの更新になると思うので、かなり遅いと思います。ご了承下さいませ。

他の更新小説にも一応載せています。では、本編に入ります…><

## 第八話：友達？

翌日。学校に行くと。話し掛けられる。

「右京さん。」

その声の主は、クラスの女子だった。私には、女友達があまりいない。なら、呼び出しかな？でも、私は呼び出しをされるようなことは………してまずね、はい。（周りの男子により）

「何？」

「話があるの。ちょっと、裏庭まで来てくれない？」

裏庭と聞いて、一瞬だけ嫌な思い出が頭の中で駆け巡った。

“生徒と恋愛なんて、ありえない”

冷めた表情でそう言った、先生のことを。

「…うん。」

私を呼び出してきた人は一人だけど、裏庭にはきつと数人いるんだ。多分彼女は、リーダーのような存在なのだと思う。名前は…兵頭恵那<sup>えな</sup>。フルネームで覚えているなんて、やるな私。いや、私が凄<sup>ひやう</sup>いんじゃないくて彼女が人気だからか。

気がつくと、目の前に彼女はいなかった。私は、少し小走り<sup>ひやう</sup>で裏庭へ向かった。少しでも遅れて、いちゃもんつけられたら嫌だしね。

裏庭に着くと、兵頭さんがいた。しかし、予想していたのとは違った。いるのは、兵頭さんただ一人。周りを見渡すが、いる気配はない。私は安堵の溜息を小さく漏らすと、兵頭さんの元へと走ってい

った。

「兵頭さん！」

「あっ！右京さん！」

私を見つけたときの彼女の笑顔は、とても愛らしかった。どうして、私の周りには美形がたくさんいるのだろうか。きっと私の顔は、美形とはとても言えないと思うのだが。

「あの…何か。」

少し腰低めで聞いてみる。兵頭さんは、クスッと笑った。その笑顔がなんとも可愛い。彼女が男女共に人気があるのも、分かる。きっと、先生だってこんな美少女に言い寄られたら…なんて、ね。

「あのね、お願いがあるの！」

「…お願い？」

滅多に兵頭さんと話したことがない。けれど、今こうしてお願いされている。内容は、まだ未明だが。

「こんなこと、わざわざ呼び出して言うのもどうかと思うんだけどね。友達になっただけでほしいな。」

彼女は、私の服の裾を軽く掴んで私を見上げた。子犬のような、大きな瞳が愛らしい。その愛らしい黒髪は、私を見つめている。女の私でも胸を騒がせるような仕草。ああ、やっぱり可愛い。

「え…も、勿論！」

友達がいなかった私にとって、こんなに嬉しいことはなかった。しかし、この時の私は少し舞い上がりすぎていたのだ。そのせいで、気づかなかつたのだ。彼女がそう言った、本当の理由<sup>ワケ</sup>を。そのウラを。

時は、私たちを置いて過ぎてゆく。私たちは、その時に完全に置いていかれないように、必死でついてゆく。けれど、彼女だけは。兵頭恵那だけは、私を嘲笑しながら苦しくもなさそうに私を置いてゆく。

瞬間、目を見開いた。

どうやら、この目は閉ざされていたようだ。そして、先程の出来事が、全部夢の住人によってみせられていたことに気が付いた。

「ヤな夢…」

私は、昨日友達になった兵頭さんのことで頭がいっぱいだつた。だから、夢を見たんだと思う。それにしただって、酷い夢だ。何でこんな夢を見てしまったんだろう？

一生懸命考える。けれど、考えているうちにその内容が馬鹿馬鹿しいことに気が付いた。「時間」という夢を見たからだろうか。夢のように、置いていかれないように、そればかり考えて。「こんなことを考えている時間が無駄だ」と思うようになった。しかしそれは、ある意味間違っていたのかもしれない。そうやってかっこつけて、肝心なことを考えないようにしていた。

その判断が、後に私<sup>のち</sup>にとって最悪な事態になるなんて…。

当時の私は、そんなこと思いもしなかった。

第九話・佐々木と、屋上で。(前書き)

いよいよ亀更新になってきました。

すみません><。

## 第九話：佐々木と、屋上で。

兵頭さんには、友達になろうと言われた。けど、友達ってお弁当一緒に食べるもんなんじゃないの？

違うのかな。でも、兵頭さんあの人たちとは食べてるし…。もしかして、あれって友達じゃないのかな？だとしたら、何なんだろう。私、兵頭さんが初めての女友達だから、分かんない。

友達って、何？

今日、兵頭さんとお弁当を食べようと思っておやつ持ってきた。けど…あの様子じゃあ、一緒に食べれないよね。いいや、一人で食べよう…。

そう思い、屋上へと足を向ける。今日は兵頭さんと食べると思っていたから、佐々木には「女友達と食べる」って言ってしまった。最初は驚いていた佐々木だったが、直ぐに微笑んで「良かったな」と言ってくれた。けど…ごめん、佐々木。どうやら、女友達というものと一緒に弁当を食べたりはしないみたい。それとも、昨日なたばかりだからかな？

屋上の扉を開く。そこには、一つの人影があった。誰だろう、なんて考える必要もない。

「佐々木……」

佐々木は屋上で仰向けになって寝ていた。近づいてみると、中々綺麗な顔が覗えた。私は佐々木の傍に腰をおろした。佐々木が起きる気配はない。まあ、いいや。このまま、一緒に寝よう…。

私は、座ったまま眠りについた。

\*

「……………うわっ、やべえ！寝過ごした！？授業は！？てか、外暗い！今何時…」

ふと視線を下ろすと、丸くなって寝ている右京の姿があつた。途端に顔が真っ赤になる。

なんているんだよ！？てか、寝顔かわい…じゃなくて！

「起きろって！おい、右京！起きなきゃ、…えーと、その。なんかするぞ！」

なんかって何なんだ、と自分でも思いつつ。とにかく右京を起こそうと必死だった。

「う…ん。…は？佐々木？」

「右京！起きた？」

「起きた？て…なんで佐々木がいるわけ？」

「それはこっちのセリフだし！俺が昼寝してたところに来たのがお前じゃん？」

「あ…そおだっけ？」

寝ぼけて、へらへらしている右京が可愛い。…気がする。

「って！それより、もう下校時刻過ぎてる気がするんだけど！」

「はあ…？下校時刻？知らないよ…」

「知らないじゃなくてっ！やべーよ！目え覚ませって…」

「うるさい…なっ！」

右京は、丸めていた体を起こした。そして、体をちぎれるほどに伸

ばし、欠伸をした。

「…ふあ。ねむ。早くかえろーよ」

「だから…帰れねえんだって…」

「え？なんで？」

「下校時刻、過ぎてるから。屋上の鍵閉まってるだろ」

「えっ！うそ！」

「ホントだって」

右京は慌てて屋上のドアへ向かい、手をかけた。しかし、ドアはガ  
ンガンと音をたてるだけだ。

「ふええ…どうしよあ…」

思わずドキ。そして、思わず抱きつ。

すると、右京はすつとんきょんな声を上げる。俺は、そんな右京さ  
えも笑わずにただ抱きしめていた。

「右京…」

耳元で囁く。右京は一瞬体をビクつかせる。俺は、そんな右京の仕  
草に集中していた。

俺の頭の中は、右京で埋め尽くされている。

今、俺の理性をぶち壊そうとしている一番の原因とえば、胸板に  
感じる柔らかい感触である。そこから、右京の鼓動が直で伝わっ  
てきて…それに、右京の胸に圧迫されてる感があった…俺の理性は壊  
れそうである。

「さ…さき？何？どうしたの？」

右京は、無意識かもしれない。けど、それも罪だということを目覚めてほしい。

その右京の可愛い声が俺の耳を刺激して…

ついに、俺の理性を壊した。

「きゃっ!?!」

抱きしめたまま、強引に地面に押し倒した。けど、右京の背中が痛くないように…そつと、俺の腕がクッションになるようにした。右京は驚いていた。当たり前か。けど、そんなことは俺には関係ない。

「お前が悪いんだからな…」

そして、俺は右京の唇に自分のものを重ねた。

「んう…」

右京からは、なんとも色っぽい声。ゆっくりと唇を離すと、頬を軽く染めた右京の顔があった。

「な…に、するの?」

「ごめん。まじでごめん。」

けど、もう無理なんだ。

「好きなんだよ。右京が。我慢しなきゃ、って思ってたのに…」

はあ、と溜息をひとつつく。それだけで体を震わせる右京。

うさぎ?可愛い。

「お前が可愛いから悪いんだ」

## 第十話・甘さ

「やめてっ……！」

ああ、佐々木が怖い。何で、こんなことするんだろう。

男の子が誰とでもこういうこと出来るって、本当だったんだ…。

「んっ…右京…」

やめて、やめて、やめて…。

自然と私の身体は佐々木を拒んでいた。そして、私のブラウスのボタンを乱暴に外していく。

その行為に、鳥肌が立つ。あの時緑川慧にされたことがフラッシュバックする。

「いやあっ………！」

思いつきり叫ぶと、佐々木は私の体から離れた。佐々木の表情はというと蒼白。この様子なら、何もしてこなさそうだった。私は安堵の溜息をついた。

「ごめっ…右京…！」

慌てふためいている佐々木を見ると、なんだか許せる気がして。平静を保ちながら、静かに「もういいよ」と言った。口調を柔らかくしても、佐々木はまだ悲しそうな顔をしていた。

「佐々木さあ…溜まってたの？」

「……は？」

思わず口にする。だって、誰とでもよかつたんでしょ？「好きなんだ」なんて簡単に言えるもん。それに、佐々木なら私の他にも相手いっぱいいるじゃん。全部全部、言ってやりたかった。口に出そうとすれば喉らへんで言葉が止まっちゃうって、イライラする。でも、なんで私がこんなイライラしているのか分からなかった。だって、私は先生が好きだもん。皆沢先生が。

だつたら、佐々木が誰とやってもいいじゃん。たまたま傍に居たのが私で、こうなっただけじゃん。佐々木は謝ってるし、佐々木とは「友達」だから許したんでしょ？

…アレ？友達？ダレト、ダレガ？

もういい、考えるのがめんどうだ。もういい、どうでもいい。私は、先生のことだけ考えてればいいの。

「…なんでもないっ。けど佐々木、次からは好きなことこついつこつとしなよ？」

作り笑顔。引きつってたかな。

佐々木、悲しそうな顔してるし。ごめん。

見てるのも辛くなってきて、私は屋上から出ようとした。

「っおい！」

呼び止める佐々木の声も、聞こえないフリ。

だって、振り向いたら泣いちゃいそう。だから、立ち止まらない。

そして、ドアに手をかけた。

ガシャン。

「えっ？」

…ドアは、開かなかった…

「…さつき、言ったじゃん。下校時刻過ぎてるから…って。呼び止めてもシカトだし。」

ああ…さつきの呼び止めは、そういう…ことだったのか。でも、それだと…朝まで、佐々木と…

「さつきはごめんな。もう、しないから。」

突然の佐々木の言葉。私が不安だったこと、分かったのかも知らない。けど、私は何言葉を発することが出来なかった。だって、自分の気持ちが分からないから。先生のこと好きなはずなのに、心が佐々木に揺れている気がする。なんて、私って単純？

これが新しい恋心、なんて思ってる。

その想いが単なる逃げ道であることを、私はちゃんと自覚していた。けど、私は楽な方へといってしまった。

先生だけを想うのが辛くって、自分を好いてくれる佐々木に逃げようとしていた。

たとえそれが周りのみんなを傷つける結果になろうとも。

## 第十一話：複雑な気持ち

「寒いね…」

少し肌寒さを感じた。いくら初夏とはいえ、半袖で夜を屋上で過ごすのは少し無理がある。防寒用に持ってきたセーターは教室だし…もう、溜息をつくしかなかった。

「そうだな」

佐々木はぶつきらぼうにそう答えた。そんな無関心な答えに少しムツとし、私は分かりやすく彼から顔を思い切り背けた。そんな私を一度横目で見る彼だったが、特に反応はしなかった。

「佐々木の馬鹿っ！さっきまでは私のカラダに興味あったくせに…私自身には興味ないんだ」

少し俯くと、佐々木がゆつくりと私に手を伸ばした。しかしそのスローに近づいてくる物は私に触れる直前で止まり、そのまま地面にストーン、と力なく落ちた。

「そんなんじゃねえよ…」

ボソツと呟いた彼を、体ごと彼に向けてやる。

「じゃあ何？」

しつこいかなあ、とかいういつもの馬鹿らしい遠慮などはしなかった。少なくとも、私にあんなことをしたんだから、今優位に立って

いるのは彼ではなく私だと思う。

「怖いんだよ」

その答えにイマイチ理解を示せない私に、佐々木が少し声を上げて言った。

「また、さっきみたいなことしちやいそうだから。…もうお前に、そんなことしたくねーの。同意なしではな。嫌われたくないし…」

最後の方は声が小さくてあまり聞き取れなかったけど、概ね内容は理解したと思う。

「そっか。考えてくれてんの？ありがとう」

力まず、自然に笑ってみた。佐々木は、そんな私を見て悲しそうに微笑んだ。

「あのさ。冗談だと思われてたら本気で傷つくから、もっかいちゃんと言わせて。…俺は、右京が好きだ。勿論、友達としてじゃない。女として見てる」

佐々木が気持ちいをストレートに伝えてきたもんだから、私は俯いて何も言えなかった。中学の時は、友情にも恋愛にも興味がなくて、孤立していた。だから、男女共に私の印象は「とっつきにくい」「じゃないかと思う。高校に入っても多分同じだった。けれど、佐々木がいたから…。明るく、誰とでもわけ隔てなく接する優しい彼がいたから。私は、少しずつ変わっていったんだと思う。友達という友達は佐々木くらいしかいないが、初めて女の子からも声を掛けてもらったし。中学の時までは分からなかった、友達やクラスメイトと

話す楽しさ。恋の幸せさ、楽しさ、苦しさ、悲しさ。それを知った  
原点は、思い返せば佐々木のお陰だった。

そんな大事な存在の人が、今私に向かって「好きだ」と言ってくれ  
ている。拒めない…。何と言えはいいか、分からなかった。ここで  
私が「ごめん」と言ってしまうえば、佐々木は離れていってしまうの  
かな？気まずくなんて、なりたくないよ。佐々木…。

「右京は、先生が好きなんだよな…？」

ビクツと、肩が上下に揺れる。だって、当たっているから。  
何で…？

ナンデ、シツテイルノ？

「お前は…緑川棗のことが…、好き…なんだろう…？」

震えた声で言う佐々木。

そんな佐々木に対して、私はというと。

「…え？は？」

小さな声で、無意識にそんな声が出ていた。いつの間にか肩の力も  
抜けていて…。だって、私が好きなのはあんな工口保険医なんかじ  
やない。私の好きな人は、紛れもない…私達の担任教師である、皆  
沢叶なんだから。

「あれ？違うの？」

キョトンとする佐々木に、私は躊躇うことなく頷いた。彼は、「よ

「かつたあゝ…」と崩れ落ちると、しばらく経ってから私を見上げた。

「じゃあ…好きな人って、…誰…？」

そう言われて、黙ってしまった。言っていないのかな？でも、これって駄目だよ。先生を好きなんて、駄目だよ。私は何と言えはいか分からなかった。

「あ…えつと…その、」

「俺が代わりになる。…って、ズルい？」

「…え？」

佐々木は座ったままで、私の腕を引つ張った。私は思わずわっ、と声を上げた。そのまま私は、抱き寄せられた。

「俺にしなよ。…代わりにでも、いいから」

何も言えず、私はされるがままだった。そして私は佐々木の気持ちに傾いてしまう…。どうすればいいか分からない、このモヤモヤとした感情の正体が分からないまま。私は、この禁断の恋から逃げ出す為に。佐々木を利用するんだ…。

最低な、女。

「忘れさせて…私から、あの人を消してよ…」

これが、本当に私の望んだことなの？

高校生である私には、わからない。

ただいっばいっばいな感情を、佐々木にぶつけた。

第十一話：複雑な気持ち（後書き）

青春ストーリー 爆

姫香の、いっぱいいっぱい自分の気持ちが分からなくなる感じ。  
ええ、私です

## 第十二話：揺れる想い、揺れる決断（前書き）

長らく更新STOPさせていて申し訳ございません。

「お嬢様の理不尽な命令」も更新する予定です。

久々で色々と鈍ってしまっていますが（笑）、本文に入ります！！

## 第十二話：揺れる想い、揺れる決断

翌朝。

警備員さんが屋上の鍵を開けたことで屋内へ入ることが出来た。

その付録として、勿論色んな先生に怒られた。生徒指導室…ではなく、会議室にまで呼ばれて長い時間お説教をくらうハメになってしまった。

これ以上は長引かせまいと、私と佐々木は肩を竦めて反省しているフリをした。

だから、どんな先生がいるのかなんて分からない。ただ下を向いて反省してますオーラを出していたから。

فقط、ほんの少し何かを思っただけ。顔を上げた。目の前にいる大勢の先生たちの顔を右側から順番に、ゆっくりと眺めていく。一番左まで見終わると、私はまた俯いた。

私たちにお説教をしている先生たちの中に、担任である皆川先生がいない。

複雑な気持ちだった。呆れているのか。だから来ないのか。私のことなんて、ドウデモイイカラコナイカラ ……？

「失礼しました」

職員室を出ると、私たちは顔を合わせて笑い合った。

「怒られたな。」

「うん。まあ、そりゃそうだよな」

私がそう言って軽く笑った後、私たちの間には沈黙が流れた。私からも特に話すことはなく、ただ佐々木の横に並んで歩いていた。佐々木も、私の横に並んで歩いているだけだった。

ふと佐々木を見てみると、怪訝そうな顔をしていた。何か佐々木の気を損ねるようなことを言ったかと、思い当たる節を探してみた。それでも分からず、ただ佐々木の顔：というより表情を見ていた。すると、今度は困ったような顔になった。

(ん?)

そこからは、コロコロと表情が変わる佐々木をずっと見つめていた。佐々木は私の視線にも気づかず、若しくは気づかないふりをして、一人で考え込んでいるようだった。そんな佐々木を見ているうちに、何だか笑いが込み上げてしまい、くすつと笑ってしまった。佐々木が私の笑い声に気づいて、こちらを振り返った。困ったような、驚いたような。そんな、よく分からない顔をしていた。その顔を見ると、もう私は笑うのを我慢しなかった。

「あははははっ！佐々木、さっきからなに面白い顔ばっかしてさ、もう笑わせないでよ！あはっ！顔コロコロ変わりすぎだしっ！」  
「え？え？顔はコロコロ変わらねえだろ……整形じゃあるまいしさ」「整形しても顔コロコロ変えられないし！どんだけお金持ち?!」  
「つか、気づいてないの？自分でさ。さっきからずっと顔が、怒ったり困ったりしてるよ？」

まだ尚半笑いになりながら、佐々木にそう言ってみた。彼はやっぱり不思議そうな顔をしていた。でも直ぐに真剣な表情になった。私は笑っていたが、彼の真剣な表情につられて笑うのをやめた。そして、彼を見た。

暫くの間、私たちは見つめ合った。何も言わず、ただお互いを見つめているだけ。息をするのを忘れそうなくらい、変な空間。少なくとも私はそんな不思議なことを考えていた。

その時、今まで微動だにしなかった佐々木が口を開いた。

「……さつき、言ったこと。本気だよな？」

何のことが分からなかった。でも、初めてみるかもしれない佐々木の真剣な表情を前にして、「何が？」とは気安く聞けなかった。だから私は、ただ佐々木を見つめていた。そして、佐々木にアイコンタクトで助けを求めてみた。質問主本人に助けを求めてどうする、と気づいたのは、SOSを送った後だった。

「さつき、屋上で。俺……お前が好きって言ったじゃん。で……その。忘れさせて」って言った、よな。それ、本気？」

ああそのことが。と、心の中で合致し、すっきりした。私はゆっくりと頷いてみせた。

「私なんかで……よければ」

「じゃあ……付き合ってくれるってこと？」

単刀直入なその言葉を、恥ずかしいとは感じなかった。私が佐々木に対して恋愛感情を抱いていないから？そう思ったが、あまりマイナスなことを考えるのはやめておきたかった。ただでさえ不安定な心の状況で、更に不安定なことを考え込むのが嫌だった。

「うん」

しっかりと頷いた。佐々木にとっては、「私のしっかりした決断」に見える頷きは、私にとってはただの「逃げ」でしかなかった。

「よっしやー！」

喜んでくれるのが嬉しかった。こんな私を必要としてくれて嬉しかった。でも、私が頷いたのは楽になるため。これ以上自分が不安定になるのが怖くて。だから、私の決断が「逃げ」であることを考えないようにしていった。

\*

私は、先生のことなんて好きじゃない。

私が好きなのは、佐々木だよ。

逃げてなんかいない。

佐々木しかみえない。

私、佐々木のが好きなんだ……。

私たちが付き合って1ヶ月が過ぎた。ちゃんと1ヶ月記念もした。でも、私は未だにこんな風に自分に言い聞かせていた。もう、このことが実現出来そうな気がしていた。最近では皆川先生とまともに顔を合わせていない。そのお陰か、先生のことを考えずにすんだ。ちなみに、緑川兄弟とも顔を合わせていない。保険医の方とは、時々ま廊下で会ったり保健室へ行った時に会う。でも、弟の慧の方とは結構会っていない。私を構うのが飽きたのだろう。元々彼は男女問わず人気があるし、女にも不足していなさそうだ。

でも、もうどうでもいい話か……。

悩むのが疲れた私は、考えることをやめた。

もういいじゃん、佐々木が好きだったことで。1ヶ月も付き

合えたんだよ。だから、あの望みのない皆川のことなんてやめちやえよ。

悪魔の自分が、そう頭の中で何度も私に囁いていた。でも、今となつてはこれが悪魔なのか天使なのか分からない。もしかしたら、天使かもしれない。私を楽にしてくれようとしているのかもしれない。ああ、なんて都合のいい女なんだろう。自分勝手な自分に腹が立つ。でも、悪魔の自分の言うことが救いの言葉に思えてきた。

そうだよ。そうだよ。皆川先生のことなんて、考えなきゃいい。望みなんてないもん。望みなんて…。

そう言い聞かせているうちに、そんな考えが自分の中に浸透していきけるような気がした。

なのに。

なのに、なのに。

それなのに、貴方は。

折角思い込めると思っていたのに。貴方なんか好きじゃない、と。どうしてこんな時に限って、私の前に平然として現れるの？どうして、私を苦しめるのよ！皆川先生が私の視界に映った瞬間、そんな自分勝手な怒りを覚えた。

その時。

「右京」

名前を呼ばれた。

声の主は……、皆川先生だ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6005h/>

---

刹那の時。

2011年9月8日13時21分発行